主人公はキツネでなければならなかったのか？

―新たな視点からの「ごんぎつね」教材研究の試み―

しぶたに学園　池田市立秦野小学校
山　際　博

はじめに

小学校の物語教材にはたくさんの生き物が登場する。例えば、タヌキ（「たぬきの糸車」、カエル（「お手紙」）、マグロ（「スイミー」、白馬（「スーホの白い馬」）、キツツキ（「キツツキの商売」）、ガン・ハヤブサ（「大造じいさんとガン」）、クエ（「海の命」）・・・・。中でも最も印象的なものは４年生で学ぶキツネ（「ごんぎつね」）であろう。江戸時代が舞台のこの物語は、いたずらばかりして人間を困らせているキツネ・ごんが主人公である。話は、ごんが村の兵十が獲っていた魚を川に放り投げるいたずらをしたことから始まる。ところが、兵十の母親の葬儀に出くわし、あの魚は兵十が病の母親のために獲っていたことに気づき、その償いのために食べ物をこっそり兵十の家に運ぶようになる。しかし、兵十にその気持ちは伝わっておらず、ある日、家に忍び込んだところを見つかってしまったごんは兵十に鉄砲で撃たれてしまう。ごんの傍らに栗が置かれていることを見て、兵十はごんの償いの気持ちに初めて気づく。ごんと兵十のディスコミュニケーション（相互不理解）による悲劇が主題の新美南吉の名作である。

こうした優れた内容を持つ「ごんぎつね」はこれまでもたくさんの教材研究が行われてきたが、今回、改めて作品を読み返してみる従来あまり注目されてこなかった問いが三つ浮かび上がってきた。本稿では、この三つの問いを追究し、そこから明らかになった事実をもとに「ごんぎつね」の教材研究の新しい視点を提案したい。

［１］三つの問い

三つの問いとは次のものである。

① 主人公はキツネでなければならなかったのか？
② 主人公の名はなぜごんなのか？
③ 冒頭部「これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。」は必要か？

まず、①であるが、「ごんぎつね」の主人公がキツネである必然性はあるのだろうかという問いである。主人公ごんは、最初、ひどいいたずらを働く悪者として登場してくる。いたずらと言うが、百姓にとって作物や獲物を奪われることは生活に関わる重大犯罪である。それを堂々と行っていたごんが、途中からは心優しい神様のような存在に人物像が大きく転換する。悪者が自分の悪事に気づいてその償いのために身を砕き、最後は死んでしまうという展開は物語の一つの定番とも言える。しかし、その主人公はタヌキでもサルでもよかったのではないだろうか。

次に②であるが、この悲劇の主人公の名前がごんである理由があるのかということである。「太郎」でも「コン太」でもなくごんという名をつけられた主人公。ごんという名は、たまたまついた名前なのか。それとも、主人公にはごんと名付けられる必然性があったのだろうか。

最後に③であるが、冒頭にこの一文がなくてもこの物語は十分ストーリーとして成立している。私も茂平も冒頭でしか登場してこない。では、なぜ、冒頭にこの一文が必要であったのか。

この三つは、実は「ごんぎつね」という物語の本質を問う重要な問いである。もし、この物語の題名が「ごんだぬき」であり、主人公の名前が「三郎」で、さらに冒頭の一文がなかったら、まったく違ったテーマの作品になったのではないかと私は考えている。そして、これらの問いを解く鍵が「キツネと人間の交流」「非業の死を遂げた人をめぐる神観念」「村落共同体の仕組み」などの日本人の民俗的心性にあると考えている。以下、この三つの問いについて詳細に検討してきたい（なお、②は①を解明する過程でその答えを明らかにする予定である）。

［２］主人公はキツネでなければならなかったのか？

この問いに対する答えは、イエスである。「ごんぎつね」は、「ごんだぬき」では成立しなかった。すなわち、主人公はキツネでなければならない必然があった。「悪者から神様へ」という両極のキツネ像は作者がフィクションとして考え出したというより、キツネと人間の交流の民俗的心性から形象されたと考えられる。その交流の民俗は日本全国で伝承されているが、実は池田にもその交流の民俗が残されている。

本章では、まず最初にごんの人物像を確認し、次にその人物像の背景になったキツネと人間の交流に関する民俗的心性を池田の資料から探っていきたい。

１．行為から見るごんの人物像

（１）器物破損、放火、窃盗・・・・・「投げ込む」

ごんは、一人ひとりぼっちの小ぎつねで、しだの一ぱいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもをほり散らしたり、菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、百姓家のうら手につるしてあるとんがらしをむしり取っていったり、いろんなことをしました。　（「ごんぎつね」p.p.8-9）

これは冒頭のごんの登場してきた場面である。ここからは、孤独なごん、暗闇の中で暮らすごん、いたずらをするごんという人物像が読み取れる。ここで描かれるごんのいたずらは、百姓たちにとっては、生活に関わる深刻な重大犯罪であったことを再度確認しておきたい。せっかくの生産物。しかも、すべて自分のものになるものではなく、おそらく「中山さま」に年貢として搾取され、一部しか懐に入ってこない貴重な生産物である。まさに悪者としてのごんである。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴょいと草の中から飛び出して、びくのそばへかけつけました。ちょいと、いたずらがしたくなったのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきりあみのかかっている所より下手の川の中を目がけて、ぽんぽん投げこみました。どの魚も、トボンと音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。　（「ごんぎつね」p.12）

ここでのごんの行為は「投げ込む」である。この行為も母親のために魚を取っていた兵十の思いを踏みにじるものであり、結果として母親の延命を脅かしたかもしれない悪行であった。

いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれったくなって、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュッいってごんの首へまきつきました。・・・・・・ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっとはずして穴のそとの、草の葉の上にのせておきました。 （「ごんぎつね」p.p.12-13）

そして、同じようにうなぎを「投げ込もう」としたがつかめず、首に巻きつかれ、最後はうなぎの頭をかみ砕くという乱暴な行為で自分自身を守ったのである。

（２）償いの行為・・・・しかし「窃盗」しかも「投げ込む」

ごんはその間に、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家のうら口から、うちの中へいわしを投げこんで、穴へ向むかってかけもどりました。　（「ごんぎつね」p.p.17-18）

やがて、ごんは兵十が病気の母親のために獲っていた魚やうなぎを台無しにしたと思い、償いとして、いわしを兵十に与えようとした。しかし、その行為はいわしの窃盗を行い、兵十の家の中に「投げ込む」というものであった。償いをしようという心情ではあったが、取った行為は悪者のごんのままであった。

（３）償いの行為・・・・「拾う」「置く」「固めて置く」

ごんは、これはしまったと思いました。「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。」 ごんはこう思いながら、そっと物置の方へまわってその入口に、くりを置いて帰りました。 次の日も、その次の日もごんは、くりを拾っては兵十の家へもってきてやりました。その次の日には、くりばかりでなく、まつたけも二、三本もっていきました。　（「ごんぎつね」p.p.18-19）

「うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをした」と思っていたごんは、兵十の独り言から、兵十がいわし屋に盗人扱いされ殴られたことに気が付き、ようやく自分の行為を改める。窃盗ではなく、栗を拾い、「投げ込む」のではなく「置いて帰る」ようになった。栗やまつたけを持っていくようになったごんは、死の直前には

土間にくりが、固めて置いてあるのが、目につきました。 （「ごんぎつね」p.24）

とあるように、ただ、置くのではなく「固めて置く」ようにもなっており、より丁寧に償いをするようになっていったと解釈できる。

（４）整理

以上を整理したものが次の表である。

A　　器物破損・窃盗・放火：百姓に対するいたずら=嫌がらせ【心情×行動×】

対象	芋	菜種がら	とんがらし
行為	ほり散らす	火をつける	むしりとる

Ｂ　　窃盗：兵十に対するいたずら＝嫌がらせ【心情×行動×】

対象	魚	うなぎ
行為	投げ込む	投げ込めずかみ砕く
心情	いたずら	いたずら

ＣⅠ　兵十に対する償い【心情○行動×】

対象	いわし
行為	投げ込む
心情	償い

ＣⅡ　兵十に対する償い【心情○行動○】

対象	栗　松茸	栗
行為	拾う　置く	固めて置く
心情	償い	償い

注目すべきは、ごんの心情と行為の関係である。ごんの心情はＡ・Ｂ（嫌がらせ）からＣ（償い）へと変容していった。しかし、ＣＩのごんの行為は「窃盗」と「投げ込む」という具合にＡ・Ｂと全く変わっていなかった。ごんの本当の変容は、濡れ衣事件により始まり心情にようやく行為が伴うようになったのである。行為や心情が「がらり」と一変することはない。心で分かっていても行動はなかなか変えることができない。これが人（この場合、キツネだが）の性ではないか。

２．悪者から神様への変容

ごんの変容に伴い、ごんの行為に対する村人の評価も変容してくる。当然、ごんの行為は村人には知られてはいない。しかし、ごんが行っている行為を村人は次のように解釈するようになっていった。ごんの人物像の変容が始まったのである。

おしろの前まで来たとき、加助が言い出しました。
「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」
「えっ？」
と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。
「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、

神様だ。神様が、おまえがたった一人になったのをあわれに思わっしゃって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」 「そうかなあ。」 「そうだとも。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ。」 「うん。」

人知れず自分のところへ栗や松茸が届けられることを不思議に思っていた兵十に対して加助はそれを「神様のしわざ」だと考える。そして「毎日、神様にお礼を言うがいいよ。」という加助の言葉に兵十は「うん」と肯定的な返事を返している。これは兵十も加助の解釈「神様のしわざ」を受け入れたと解釈できよう。これを聞いたごんは「つまらない」と思い、「神さまにお礼を言うがいいよ」という加助の言葉に「おれ、引き合わないなあ」と感じている（「ごんぎつね」p.23）。この部分を「孤独になった兵十に栗などそっとくれるような人間はこの世界には思いあたらないことを意味」していて「封建共同体の人間疎外の状況の象徴」とする見解もある（西郷竹彦１９７５）。しかし、これは江戸時代の村では、不可思議な善的行為を「神様のしわざ」と村人が解釈していたと考えるべきだろう。兵十の村でも、いたずら行為は狡猾な悪者（キツネ）の特性、人助け行為は神様の特性と考えていたのである。

兵十は栗や松茸の供応に感謝していたが、それをしてくれた存在は神様を想定した。つまり、感謝の対象は神様であった。しかし、実際は憎しみの対象であったごんであった。しかも、ごんは兵十に気付かれないままずっと供応を続けたので、兵十とごんの思いの深刻なずれはどんどん広がっていったのである。

感謝の念を起こさせる行為	兵十の解釈	実際
栗・まつたけの供応	不明→神様と想定	憎しみの対象＝ごん

まさに兵十とごんとのディスコミュニケーションである。不幸なことにこのディスコミュニケーションはごん射殺事件によって、初めて解消に向かうことになった。ごんの命と引き換えに兵十は真実を知ったのである。この事件を境に兵十の中でごん認識が悪者から神様へと一気に変容したのである。ごん自身の変容は、兵十の母親の葬式や濡れ衣事件によって始まっていたが、兵十自身のごん認識の変容は、射殺事件を経なければ始まらなかったと考えられる。

ところで、悪者から神様へと変容したごんではあるが、そのきっかけになった出来事は、兵十の母親の葬式であった。ここで疑問が一つ生じる。ごんはなぜ変容したのだろうか。最も確かな読みは、この出来事を通して、ごんが兵十に自ら

の境遇を重ねていったと考えることであろう。これが物語の読みの王道である。
　しかし、ここではもう一つごんという名前自体に心情と行為の変容の種が埋め込まれている可能性を考えてみたい。そこで問いが前後するが、第２の問い「『ごんぎつね』の主人公の名はなぜごんなのか？」についての解明を先に行い、ごんという名前自体に悪者から神様へと変容する必然が込められていたことを明らかにしたい。

３．主人公の名はなぜごんなのか？

　ごんという名前は、「ごんた」の略称である。「ごんた」の漢字表記は「権太」である。「権太」を辞書で引くと「①わるもの。ごろつき。　②いたずらで手におえぬ子供。」（『広辞苑』p.919）とある。さらに「権太」の由来を紐解くと人形浄瑠璃「義経千本桜」の登場人物「いがみの権太」にたどり着く。いがみの権太は「浄瑠璃『義経千本桜』中の人物。釣瓶鮨の子で無頼漢だったが、鮨屋の段で改心して、妻子を平維盛の妻子の身代わりに立て、自らは父の刃に倒れる。」（『広辞苑』p.107）役どころである。権太とはこうしていたずらっ子や乱暴者の男児を表す名前となった。この名前から「ごんたくれ」という言葉も生まれた。
　ここで、私はいがみの権太が最後まで悪者ではなかったことに注目したい。権太は、金品をゆするならず者として登場するが、クライマックスで維盛を救うために苦心し、最後には命を落とす。権太は悪者から善者へと変容したのである。これはごんが悪者から神様に変容していった過程と見事重なる。ごんという名前がこのキツネにつけられた理由がここにある。「義経千本桜」で悪に徹底できない優しい心の持ち主として設定された権太。その権太から生まれた「ごんた」という子供のあだ名。その略称としてのごん。悪から善への変容の象徴としての名称が権太＝ごんであったと推測される。太郎でも三郎でもコン太でもなくごんと名付けられる必然性がここにあったのである。（注）
　これまでの検討で明らかになったことは次の通りである。

- 「ごんぎつね」の主人公は、最初、悪者として登場し悪行を行う。
- 「ごんぎつね」の主人公は兵十の母親の葬式と濡れ衣事件を契機に改心する。
- 「ごんぎつね」の主人公は兵十に償いの行為を行うが、兵十はその行為を神様の行為と認識するようになった。
- 兵十に殺されることによって「ごんぎつね」の主人公は、初めて兵十に自分の償いの心情を理解される。
- 「ごんぎつね」の主人公のごんという名前には、悪者から善者（神様）への変容の必然性が込められている。

さて、以上をもとに、いよいよこのように形象されたごんがなぜキツネでなければならなかったのかという問いの解明に論を進めていきたい。

４．両義的な存在としてのキツネ

ここからは、テキストから少し離れてキツネと人間の交流の民俗伝承に碇を下ろし、検討を加えていくことにする。なぜなら、先に述べたようにこのごんの人物像は作者のアイデアを超えてキツネと人間の交流に関する民俗的心性が産み出したものだと考えられるからである。なお、検討に当たっては『池田市史』、『池田・昔ばなしと年中行事』及び秦野小学校区での聞き書きメモ（以下、これらを資料と総称する）を活用する。

資料には、池田市内各地域の民俗伝承が掲載されている。その中にキツネに関する伝承は数多い。それらの伝承は西日本特有の伝承もあるが、多くは本州・四国・九州に共通して分布する伝承である。その伝承を分類してみると大きく二つになる。

A　恐怖の対象としてのキツネ	B　祀られる対象としてのキツネ

このＡとＢは全く正反対の伝承である。以下、恐怖の対象としてのキツネ伝承と祀られる対象としてのキツネ伝承の事例を池田市内各小学校区ごとに紹介し、その持つ意味を考えていく。

（１）Ａ：恐怖の対象―人間を化かすキツネ―

まず最初は、恐怖の対象としてのキツネ伝承である。

秦野小学校区

＜東畑＞『池田市史５巻』p.393

・秦野小学校の南に狐薮とよばれた竹藪があった。

・西畑村の東端にある辻のあたりは、狐が女郎に化けて出没するのでジョロウガイチ（女郎垣内）とよばれていた。御馳走を持って帰るときに、狐が縞の着物を着た女に化けて、「お兄さん」と言い寄り手をつなぎにきた。村人が「どキツネ」と言って女の手をつかむと、女は狐の姿に戻り逃げて行ったという話がある。

・ある巡査がオリ（折詰の御馳走）を持って歩いていた時、それを狐に取られそうになったが、オリを離さずにいると、帽子を取られてしまったという。

＜西畑＞『池田市史５巻』p.407
・上渋谷の水神さんを祀っていた場所で、狐にだまされたという話があった。

＜上渋谷＞『池田市史５巻』p.p.421-422
・ある村人が山へワラビ採りに行った帰りに道に迷い、どうしても家に帰り着けなくなってしまった。狐が引っ張っていると感じて、残っていた弁当を置いてやると、無事に帰ることができた。
・狐は、マッチに火をつけると消えてしまうので、山道を御馳走をもらって帰るときには、マッチをもらった。
・市立渋谷中学校の西側や、才田村と池田町の間の人家が途絶えた場所（周囲が田んぼ）とくに以前は池だった現在の辻が池公園あたりは、狐にだまされやすい場所だった。そのような場所で、御馳走を取ったり、運送中の下肥をひっくり返したりするのは、狐の仕業だと言われていた。

＜下渋谷＞『池田市史５巻』p.443
・上渋谷の人が、嫁入りの祝いに池田に行った帰り、折り詰めを持って歩いていたところ、ジュントウ畑（池野小児科前）の藪で、狐に化かされて折り詰めを盗まれ、畑村の墓で、朝に気づいたという。
・同じくこの藪で狐の明かりがついていることがある。この時、男はタバコに火をつけ、女はツゲの櫛で髪をときながら通ると化かされないという。
＜西畑＞　聞き書き
・秦野小学校の北、仏日寺の周りに我孫子の森と呼ばれ、キツネが出没した。森には旧麻田藩の武士の墓場があった。
・Ｚさんは大正初期の生まれ。７６才で亡くなった。出生地は川西。１７歳で西畑に嫁に来たという。嫁に来てから、Ｚさんは理解できないことを話し出すようになり、キツネ憑きではないかと言われるようになった。Ｚさんは、キツネを落とすためにいろいろな場所に修行に出かけた。どこに行ったかは、すべてはわからないが、いずれも山中での修行であった。北摂近辺の山から伏見稲荷大社まで行き、最終的に滋賀県の天台寺門宗・園城寺に行き着いた。そうした修行の結果、Ｚさんは霊が見えるようになり、祈祷や霊視をする祈祷師になった。そして、Ｚさんは昭和１４年に「加持祈祷免許候事」という特許書及び補準教師に補任するという補任書を園城寺長吏田中道淳大僧正から付与されるまでとなった。さらに昭和２６年には、園城寺貫主青峰良覺大僧正より、補大律師に補任された。夫も共に山で修行をしたが、夫には霊能がつかなかった。しかし、夫にも居合抜きの本身を半紙一枚で持

ち、一方の手に火箸を挟んだ姿の写真がある。Ｚさんは信者から先生と呼ばれていた。不動明王をメインに祀り、稲荷も祀っていた。お勤めは読経を行った後、火護摩を焚いた。火護摩は天井から御幣をつるし、その下で焚いたが、炎は御幣には全く燃え移らなかった。鳴り護摩を行うときもあった。鳴り護摩は、桶にコメを蒸して入れ、何かで焚くと音がする。それを持って歩くが、何かある場所になると音が消える。例えば、失せ物だとそこにあるという具合である。毎月１６日が不動さんの命日で信者が集ってきた（Ｚさんが亡くなって後も今でも数人が毎月集まっている）。

五月丘小学校区

＜おんばのほところ＞『池田・昔ばなしと年中行事』p.35

・宮の下から射場（綾羽二丁目）を通り北山の口（城山町）から杉谷川に沿って、接待池（現・五月丘小学校）の手前に出る狭い道がありました。

　杉谷川沿いは、竹やぶや大きい樹木がうっそうと茂り、昼でも薄暗い急坂でしたが、北の口や新町から畑方面へ行く近道で“おんばのほところ”と呼ばれていたのです。

北の口のある店で畑村に急用ができたので、夕暮れ、小僧にこの道を教え使いに出しました。

　その小僧が竹やぶにさしかかると「ホーッ、ホーッ」と気味の悪い鳥の鳴き声が聞えて、風もないのに“ザァー、ザァー”とやぶがざわめいています。何となく恐ろしくなりました。そして観音堂の下あたりに来たとき、にわかに雨が降るような音がして、上から砂が降って来ました。

　驚きとこわさで、いきせききって急坂を走り、もう少しで街道という大樹の下を通ろうとすると、白い提灯のような何か判らないものがフワリ、フワリと浮いて竹やぶに流れていきました。

　人魂ではないかとキモをつぶし、目をつむって四つんばいになって、ようやく街道に出たそうです。

　この話から「わしも見た」「わしもそんな目におうた」という人が次々とあらわれて“おんばのほところ”には化け物がいるそうなと、うわさされていました。

　勇気のある人は、どうせ狐か狸やないかと、わざわざ肝ためしに行くようになりました。

　杉谷川の水害後、復旧と開発で今は住宅地となり、その跡形もありませんが、昭和初年ごろまでは青少年の肝だめしの道場でもありました。

＜茶臼山の狐＞『池田・昔ばなしと年中行事』p.36

・今の「山手線」は」立派な道路ですが、以前は幅二メートルほどの巡礼街道でした。

　かなり急な峠道で、接待池（現・五月丘小学校）から東は両側の草木がおい茂ってトンネルのようにうす暗く、地下水が湧きでていつもじめじめしていました。

　ある日、新町のある店の番頭が畑村に商用で行き、夕暮れ、提灯を借りて巡礼街道を峠の一軒茶屋まで行きました。

　ここから池田までは下り坂で早く歩けるはずなのに、何だか足がもつれて歩きにくくなるのです。

　ぶら下げていた提灯が時々つき上げられるようで、灯が暗くなったり、明るくなったりするので「これはおかしい、狐の仕業ではないか」と気をつけて、チョコチョコ走りで接待池の手前まで来ると、ヒョイとつまづいてこけました。

　そのひょうしに提灯の灯が消えました。起き上がってマッチで灯をつけようとすると、ローソクが無い。「おかしいな」と思いながら暗い夜道をトボトボと帰り、主人にその話をしました。

　主人は、「ようあるこっちゃな。こないだは折り詰めのご馳走をとられた人がいた。また、腰に下げていた弁当をとられた人もいたそうな。ローソクは狐の好物やさかいに、多分、狐の仕業ではないか」とカラカラ笑いました。

　茶臼山一帯はみかん畑や梅林で、狐や兎がたくさんいました。有名な稲荷社もあり、大正の初めごろまで兎狩りをしていたところです。

緑丘小学校区

＜才田・尊鉢＞『池田市史５巻』p.457

・この田園地帯の向こう南西方向には、キツネヤブとよばれた竹藪があった。そのあたりの田んぼで狐が出たと伝わる。

池田小学校区

＜綾羽＞『池田市史５巻』p.190

・指物師である人が家具を納めに伊丹に行った帰りのこと、雨がショボショボ降っていた。川西小学校のあたりの田んぼまで来ると急に荷物が軽くなった。見るとイナリ寿司がなくなっていた。

・現在、横岡公園になっている道を東に行った所に、峠の茶屋という一軒茶屋があった。両側は鬱蒼とした松林であった。そのそばに石段があって祠があった。その祠に供えた油アゲは（狐が食べたのか）なくなっていた。

呉服小学校区

＜室町＞『池田市史５巻』p.771

・室町の西には川原があった。当時は、猪名川の堤防にたくさんあった。だからそれを使って七夕祭をおこなっていた。ここは薄気味悪い空間でもあった。ゴンデンヅヅミ（権田堤）には丑の刻参りをする人がいて、白装束で大きな椋の木に釘を打ち付けていたらしい。朝早く、椋の木に釘が刺さっているのを見つけたことがある。ゴンデンヅヅミというのは、能勢の妙見さんにお参りをする人が白装束で、団扇太鼓を叩きながら通っていく土手道である。・・・・・・池田から尼崎に魚を仕入れに行った人が、狐にだまされたのもここである。

橋詰には、呉服座があって春先には豆芝居が興行されていた。有名な東西屋が、馬や竹馬に乗って鉦や太鼓で囃し立てて来るなどしていた。呉服橋を渡った川向うの川西屋という芝居小屋には狐が出た。

神田小学校区

＜神田＞『池田市史５巻』p.475

・狩猟は、お宮のあたりの竹林や、狐薮とよばれるところでおこなわれた。狐薮とは池田の火葬場の南、ダイハツのあたりのことをいった。H さんが鉄砲の免許を持っていて、狸の襟巻を作っていた。大正十四－五年（一九二五－六）ごろは空気銃がはやって、雀撃ちをした。

またこのあたりでは、明治の終わりごろに、西洋人が車夫二人に車を曳かせて鉄砲猟に来て、狐を撃っていたらしい。

＜神田＞『池田市史５巻』p.486

・狐火が飛んだといった話や狐にだまされたといった話もあった。

＜土壷で行水＞『池田・昔ばなしと年中行事』p.34

・ある人が夏祭りに招かれて、海山の御馳走と酒をたくさんよばれていいご機嫌になり、おみやげにもらった重箱をさげて、ブラリ、ブラリと千鳥足で神田道を帰りました。

　とっぷりと日は暮れて村はずれまで来たとき、突然きれいな娘さんがあらわれました。

「おっさん、おっさん、今日は暑うおましたな。お湯がよう沸いておりますさかいに行水でひと汗流して帰りなはれ、行水したら涼しおまっせ」とやさしく、親切に何度もすすめてくれました。

暑いのと、ちょっとくたびれたので、つい娘さんの言う通り行水をさしてもらい、うつら、うつらとひと眼ねむりしたそうです。
ふと目がさめると、道ばたの畑の真ん中で「アッ、これはおかしい」と気がつくと、土壷の中でした。
あぜ道に着物はそのままありましたが、おみやげの重箱と娘さんの姿が見えません。
「アレッ！だまされた。狐にやられた」と悔やみながら小川で身体をきれい洗って帰りました。
土壷はし尿貯蔵場です。狐やぶは桃園から南、ダイハツ工場西側一帯にあった大きい竹やぶで、狐や狸がたくさんいたそうです。

石橋小学校区

＜石橋＞『池田市史５巻』p.511

・母の里である箕面市白島の祭に行った父が、御馳走を持って石橋に戻るとき、長山のミカン畑の柿の木の下で、狐にだまされた。野壷を温泉と間違えて入り、御馳走をとられた。
・一番電車が通ると、狐が山に帰った。

その他

＜狐のしかえし＞『池田・昔ばなしと年中行事』p.1

・明治の中頃、尼崎から池田のまちへ、天秤棒で魚をかついで行商に来ていた魚屋が何人もいた。
ある日、酒ずきの魚屋がいつものように魚桶をかついで川西の加茂までくるとやぶかげの小川で狐が水をのんでいる。いたずら心を起こしたその男は、天秤棒を片手にこっそり近より狐の背中を力いっぱいなぐると、狐は悲鳴をあげて逃げていった。
さて、池田のまちで「いわし」を売りつくし、いつものようにお酒を一パイやって伊丹の池まで帰ってきた。すると急にあたりが暗くなってきたので、池の近くにある一軒茶屋に立ちよって、そこの婆さんに提灯を貸してくれといった。婆さんはまだ明るいのになぜ提灯がいるのかと不思議に思いながら「ここにないから近くに行って借りてきてあげる」と言って出ていった。
ずいぶん酔っていた魚屋は、床几に腰かけて待っていた。ふと家の中を見ると棺桶が置いてある「ああ、棺桶があるなあ」と見ていると蓋が少しずつおし上げてくる、そしてとじる。じっと見ているとまた蓋をおし上げて来る。
魚屋は少しずつ後ずさりをはじめたが、やがて棺桶の蓋を高くもちあげて

青白い腕がニューと見えたので「キャッ」と叫んで後へさがった。
そのとたん魚屋は池に落ちて「ハッ」と気がついた。この様子を堤でみていた荷車ひきの男は“あのおっさん、なにもないのにだんだん後ずさりして池に落ちるなあ”と眺めていたという。
　池から救いあげられた魚屋は「今朝加茂で狐をなぐったのでばかされたにちがいない」と人々に語っていたという。
　ちなみに池田で魚屋の屋号に尼安、尼丑、尼常、尼定などとあるのは尼崎から魚屋がきていたからである。

以上多様な伝承が確認できたが、ここに共通するものは、人間を騙し、化かす恐怖のキツネの姿である。その出現場所は、町中ではなく、町や村の境界領域である藪、池、田畑、山、河川敷であり、村人にとって不気味な怖い場所であった。これらの境界領域は三つに分類される。

A　村はずれ	B　旧池田町域から畑村を結ぶ山道	C　猪名川河川敷

伝承に現れる村はずれは人々にとって恐怖の場所であったと想像できる。例えば、狐藪と呼ばれた竹藪や森。鬱蒼とした竹林や森は昼間でも暗く、人気もない場所であっただろう。そこに恐怖の狐も出没したわけである。さらに西畑の森には墓場もあった。神田の狐藪は火葬場の南にあった。伝承では明治の終わりには西洋人が狐で鉄砲猟をやっていた。またこの狐藪は猪名川の川原の権田堤（ゴンデンヅツミ）とも近接していた。権田堤は笹が生い茂り、大きな椋の木があった。大きな椋に白装束で釘を打ち付ける丑の刻参りが行われたり、白装束姿の妙見参詣者が団扇太鼓を叩きながら通る空間であり、寒センギョも行われたし、狐に騙される空間でもあった。また、川原には墓場もあり、火葬場もあった。聖であり不気味な空間であったといえよう。
　このような場所で、キツネは、人間を化かし、ご馳走を奪ったり、下肥をひっくり返したり、池や野壷にはめたり、狐火を起こしたりしたわけである。恐怖の場所＝狐の出現場所であったわけである。
　一方山道で、人間は不思議な体験をする。不気味な音や風を聞いたり、提灯が消えたり、急に歩きにくくなったり、引っ張られたりする体験である。これはすべてキツネの仕業だと解釈して、キツネへの恐怖心を高めていった。また、キツネはマッチに火をつけると消えるのでマッチをもらって帰るとよいとされた。
　さらに注目したいのが、西畑の祈祷師Ｚさんである。Ｚさんは若い時に意味不明な言葉を話すようになった。その原因を家族（や村人）はキツネ憑きだと考えた。キツネを下ろすためにＺさんは、山を歴訪し修行をした。山岳修験によるキ

ツネ降ろしの結果、霊力を身に着けるようになった。ここでもキツネは人にとりつく恐怖の存在であった（この事例ではキツネの出現場所はいわゆる境界領域ではないが、Ｚさんはキツネが下りたのちも家で祈祷師として憑霊した。そこで、Ｚ家も便宜的に境界領域とする）。

以上を整理したものが＜表１＞＜表２＞である。

＜表１：キツネの出現場所＞

境界領域	Ａ村はずれ	：ア１	狐藪（秦野小学校の南）
		ア２	我孫子の森（秦野小学校の北・仏日寺周辺）
		イ	女郎垣内（西畑の東端）
		ウ	水神さんを祀っていた場所（上渋谷・渋中前）
		エ	渋谷中学校の西側
		オ	才田村と池田町の間の人家の途絶えた場所
		カ	辻が池公園
		キ	ジュントウ畑の藪（渋中南・池野小児科前）
		ク	峠の茶屋（横岡公園）
		ケ	キツネヤブ（才田・尊鉢）
		コ	狐藪（ダイハツのあたり）
		サ	長山のミカン畑（石橋）
		シ	加茂のやぶかげの小川
		ス	伊丹の池の一軒茶屋
		セ	村はずれ（神田道）
		ソ	田んぼ（川西小学校）
	Ｂ山	：タ	山道（山にワラビ採りに行った帰り）
		チ	おんばのほところ（杉谷川沿いの山道）
		ツ	茶臼山（巡礼街道・畑村から池田に）
	Ｃ河川敷	：テ	ゴンデンツヅミ
	Ｄ家	：ト	Ｚ家

＜表２：キツネの行為＞

化けて騙す	Ａ食物を奪う	（イエオカキクサソ）
	Ｂ騙す化かす	（ウキタチテ）
	Ｃ狐火	（セ）
	Ｄ野壷	（サセ）
	Ｅ下肥をひっくり返す	（エオカ）

	Ｆ道を迷わせる	（タチテ）
	Ｇ池に落とす	（ス）
	※ア１・２は化けて騙すという伝承ではないが、不気味な雰囲気が確認できる。	
キツネ憑き	Ｈ意味不明なことをしゃべらせる	（ト）

＜写真１＞（国土地理院地図より作成）は１９４８年のもので、北は木部、南は神田、東は秦野、西は池田市街地をカバーしている。写真の白抜きがキツネ出現場所である。池田市街地とその周縁になる猪名川河川敷、秦野、石橋、才田・尊鉢、神田地域相互の境界領域にキツネが出現していた（この写真を見ると、戦後間もないこの時期には、池田はまだ住宅の開発は阪急池田駅近辺に止まっていることがわかる）。

＜写真１＞

こうして見てくると日本人の民俗的心性に、キツネは恐怖の存在であり、人間に危害を加える悪者という認識があったことは間違いない。「ごんぎつね」のいたずらをするごんはまさに悪者としてのキツネ像を背景として生まれてきたといっても過言ではないだろう。

しかし、資料に記載されているキツネ伝承にはもう一つのキツネ像が存在する。すなわち、祀られる存在というキツネ像である。

（２）B：祀られる対象：人間に感謝されるキツネ

もともと、古来よりキツネは、その姿形から稲に関わる動物と考えられた。そして、人間に憑依し、農作物の豊凶を占う存在とされていた。そして、稲荷神（稲を荷う神）＝農業神の神使ともされたが、次第に稲荷神＝キツネと観念されるようになっていった。

A 古来のキツネ信仰　：動物霊としてのキツネが人間に乗り移って託宣をする。農作物の占いをするキツネ

B 古来の稲荷信仰　：稲を担う神（田の神）としての稲荷

↓

近世に AB が習合：豊作の託宣をするキツネ＝稲荷神（田の神）

こうして池田市域広がっていった祀られるキツネ（神様としてのキツネ）伝承は大きく分けて二つ。「初午」と「稲荷センギョ」である。

① 初午

初午とは、旧暦２月の初めての午の日に稲荷神を祀る民俗である。和銅４年（７１１年）の２月の最初の午の日に、伏見稲荷大社の祭神が稲荷山（伊奈利山）の三箇峰に降りたとことにちなんで、初午に稲荷神を祀る祭・初午が始まったとされる。また、旧暦３月は稲作が始まる時期でもあり、山から降りてきた馬に乗った稲荷神＝キツネを祀る農業祭でもあるとも考えられている。池田市でも初午を祀る小学校区がある。

秦野小学校区

＜東畑＞『池田市史５巻』p.395

・ハツウマ（初午）の日には稲荷祭があり、家の稲荷の祠や天満宮の稲荷に、「正一位稲荷大明神」と書いた旗をあげてお参りする。

池田小学校区
＜伊居太神社＞『池田市史５巻』p.132-133
・文化八年（１８１１）に境内に稲荷を勧請し、翌年のハツウマ（初午）には多くの参拝者を集めている。

細郷小学校区
＜吉田＞『池田市史５巻』p.326
・一月のハツウマには、吉田公園にあるお稲荷さんに、御神酒、赤飯、アゲ、お菓子を婦人会の人たちがお供えする。細川神社の宮司にご祈禱してもらう。これが済むと、婦人会みんなでお供えをおすそわけし、稲荷の前でにぎやかにすごす。忙しい時は、ニノウマでも」よい。二月におこなうことも多い。

石橋小学校区
＜井口堂＞『池田市史５巻』p.517
・（注・稲荷山）古墳の墳頂に稲荷を祀った祠が建っている。稲荷山古墳の名前はこの稲荷から名付けられたもので、」以前は新家稲荷山古墳といった。

＜井口堂＞『池田市史５巻』p.524
・初午は旧暦の二月におこなわれる。ハツウマではなくニノウマである。イグットのミナミチョウカイ、ハタケナカのナカチョウカイの二つで、稲荷山古墳の墳頂にある稲荷にお供えをする。お供えはお菓子などで、後で子供たちに配られる。昭和初期まで、京都の伏見稲荷から神官が来て祝詞をあげていたという。現在は三月におこなわれている。

② 稲荷（寒）センギョ

稲荷センギョは寒センギョともいわれる。センギョは施行のことで、大寒のころ、地域のキツネの出没しそうな場所に供物を供えて回る民俗である。

秦野小学校区
＜上渋谷＞『池田市史５巻』p.423
・また、寒の内には寒センギョがおこなわれ、稲荷社や薮、森、水神さんなど狐が出そうな場所に、小豆の握り飯と薄アゲを供える。以前は十軒くらいの家々が組んだり、西畑と共同でしたこともあったが、最近は参加する家が少なくなり、各家で個別におこなっている。昔は、明るいうちに供えに行くと犬や猫に食べられてしまうので、暗くなってから供えに回った。

＜西畑＞　聞き書き

・稲荷センギョは、大寒の時期に行っていた。講のような感じでＺ家に１３軒の人が集まり、昼に油揚げを刻んだものと小豆飯を１００個ほど包んだ。この１３軒は家でも稲荷を祀っていた。ご飯は西福寺の稲荷社と西福寺の山の裏、天満宮の稲荷社と裏、吉祥院の稲荷社、ミロクサン（天満宮境内・奥池のほとり）、石澄の滝（その辺りには昔、温泉が湧き、温泉宿もあった）、我孫子の森（仏日寺周辺）の西端、仏日寺山門に手分けして置いて回った。寒くて食べ物がないため食料がないキツネにお供えするためである。我孫子の森には麻田藩の武士の墓もあった。我孫子の森には明治時代に伝染病の隔離病棟があり、昼間に家族が食料を入院患者に持ってきたが、家族が帰った夜にキツネが寄ってきてその食料を食べに来たという話もあった。

　昼のお供えづくりは各家持ち回りだったが、夜はそのメンバーが再びＺ家に集まってお勤めをした。Ｚ家には霊能を身につけた祈祷師のＺさんがいて、信者が集う家であった。そのため、集まりやすかったと思われる。Ｚ家ではＺさんが主宰となって稲荷降ろしが行われ、龍神や我孫子の森の稲荷神や野ギツネがＺさんに憑依してさまざまな託宣を行った。お勤めの後は、Ｚさんの姑がにわかが好きで、踊りや芝居を披露した。そして、おしゃべりをしたりして楽しんだ。この集まりは全員がこうした余興のようなものが好きで、昔、秦小の学芸会で「貫一お宮」の芝居を子供たちの前で演じたこともある。稲荷センギョは徐々に参加する家が少なくなったが、平成５・６年ごろまで２軒で続いていた。

、

緑丘小学校区

＜才田・尊鉢＞『池田市史５巻』p.465

・寒の時分には、カンセンギョウ（寒施行）をする。アンコロ。餅、赤飯を炊く。戦前は、ドンドバなど狐がいそうな所にアゲ（油アゲ）を竹の皮に包んで置いた。この時、「センギョウ　センギョウ　ドウセンギョウ」と囃しながら回った

池田小学校区

＜稲荷施行＞『池田市史５巻』p.99

・稲荷施行というのは、稲荷信仰から始まったものと聞いている。寒い間はお稲荷さん（狐）も食べ物がないだろうから、不自由をさせないように食べ物を供えようという行事である。

　昭和初期（昭和８～９年頃）まで荒木町（現大和町の東）では毎年大寒の

入りに町内で当番を決めて、餅つき用の大釜を道路に出して赤飯を炊く。豆腐屋では特別の油揚げを３００枚ぐらい作ってもらい、城山町の谷垣内竹皮店では竹の皮を沢山買ってくる。

竹の皮に、油揚げを乗せた大きな赤飯のおにぎりを二つ包む。これを狐のいそうな場所へ持っていって、食べやすいように竹の皮を開いてから、みんなで　大きな声で「せんぎょ、せんぎょ、稲荷せんぎょ」と言いながら置いて帰るのである。

荒木町では、子供１５人、大人１５人合計３０人ばかりが、午後７時過ぎに町内を出発して、次ぎの所を廻って帰る。

町内→鎮山（現図書館、横岡公園）→池田山の峠の茶屋→接待池（現五月丘小学校）→おんばのふところ→城山町→ひょうたん山（現ダイハツ池田工場）→帰町

町に帰ってくるのは午後１０時頃になる。夜、狐のいそうな所を廻るこの行事は、子供にとってまことに恐ろしいものであった。もし怖がって行事に参加しないと、皆から臆病物と笑われるので、しかたなく参加したものである。

＜室町＞『池田市史５巻』p.771

・カンセンギョ（寒施行）といって寒に狐に油揚げをやりにいく人がいた。

＜城山町＞『池田市史５巻』p.p.209-210

・個人的に稲荷を家で祀っている家も多かった。彼らは、寒の間に、男性数人が寄り合い、「センギョ、センギョ、お稲荷さんの野センギョ」と言って、辻々の地蔵さんや祠にかやくご飯（炊き込みご飯）を供えていった。その後、特定の家に集まって巫女よせをして、ご託宣を聞いた。巫女になるおばあさんが町内に二人ほどいた。普通の服装であるが、男性が「どちら様ですか」と尋ねると、憑いた神の名を答える。

細郷小学校区

＜古江＞『池田市史５巻』p.345

・森さんの屋敷の山手の所にお稲荷さんが祀ってあった。子供たちが「正一位稲荷大明神」と書いた旗を持って、「イナリダイミョウジン」「イナリセンギョ」「オイナリセンギョ」と声を出して、鐘やらを持って山の方や村の中を回った。後で森さんからお菓子をもらった。これには女の子も参加していた。森さんの屋敷をつぶすころまであった。ハツウマ（初午）には清荒神さんに参った。

このように初午・稲荷センギョともキツネを神として祀る民俗であった。初午

は神社色が強いが、稲荷センギョは民間信仰的な的な色彩が強い。

池田の稲荷センギョの由来については資料に次のような昔話が紹介されている。

五月丘小学校区

＜狐の恩返し＞『池田・昔ばなしと年中行事』p.2

・池田山（五月山）のふもとに住む市左衛門という山持ちから、私の父が聞いた話です。

明治の中頃のことでしょうか、不作が二年続きました。山の狐も食べ物がないので里におりて、市左衛門さんの裏山に巣を作り、子どもが生まれましたが、食べ物がなく毎夜のように子狐がなきます。そこで家人が三度三度えさを与えてやり、おかげで子狐も大きくなりました。

昔は、五、六軒の農家が共同で田植えをしたものですが、ある日、市左衛門さんは、前の晩に苗を準備しておきました。

あくる朝一番に行ってみるとどうでしょう！田んぼ一面、苗がバラバラに植えてあり、狐の足あとがたくさんついているではありませんか。

こんな植え方では（雑）草とりも満足にできないと思いながらも、念のためうらない師にうらなってもらいましたら「このままで大丈夫、草とりや肥料もいらない」ということなので、放っておいたら、いつもの年の二倍のお米がとれました。

これはきっと狐が恩返しをしてくれたにちがいないと思った市左衛門さんは、赤飯でおにぎりを作り、油揚げをそえ、竹の皮につつんで狐の出そうなところへ置いてまわりました。

ところがその後も何回か箱火鉢の引き出しから、おぼえのない五円札（当時、年季奉公は一年で一円）が出てきたことがありました。

それから赤飯と油揚げを狐にそなえる稲荷せんぎょ（「寒」の頃するので「寒せんぎょ」ともいう）という風習が各地に広がったともいいます。

これは明治の中頃とされるが、各地の伝承を勘案するとそれ以前から伝承されてきた民俗とも考えられる。

稲荷センギョは、近畿地方に分布する民俗で、その多くは民間宗教者（祈祷師）が主宰となって行われるものである。例えば、大阪府泉南地方（赤田２００５・久下２００９）や京都府南山城地方（前野雅彦２００６）では、ダイ（あるいはダイサン）と称されている民間宗教者が稲荷センギョ（寒センギョ）を主宰し、キツネへの供物を置く場所もダイが指示している。また、民間宗教者のもとには信者が集まり、泉南地方では彼らによって稲荷講や神徳講が構成され、講員は掛金を集めて講を維持し、伏見稲荷大社へ参拝に行くなどの行事も行っていた。南山城地方では、民間宗教者は黒住教や扶桑教といった教派神道に所属しており、

各派の布教をおこなう教師でもあった。池田でも西畑ではＺさん（園城寺認可の祈祷師）が中心となって稲荷センギョが行われていた。夜にはＺさんによる託宣、城山町では巫女による託宣も行われていた。また、城山町では稲荷センギョの後に巫女からの託宣を聞いたが、本来は最初から巫女が関わっていた可能性も考えられる。また、稲荷センギョの起源については現在二つの説がある。

Ａ　稲荷行者の託宣からキツネへの供物饗応へ（井之口１９７３）

> 稲荷信仰の発展の発展途上に、いわばヒズミのようなものがあって、稲荷さげとか稲荷下ろしといわれる、職業的または半職業的な人たちができる。それを中心として寒寄せという託宣がおこなわれる。そうしてその結果、ありがたいお狐様と同じものが、野山に餌もなく困っているのだろうというので、寒施行を始めたのだと考えられる。

Ｂ　農業神キツネへの供物饗応から稲荷行者の関わりへ（赤田２００５）

> ・・・・・農業神のキツネを接待するために、「ノマキ」と称するような供物饗応の民俗の古層があり、それが一五世紀中葉の頃の惣村制成立期に社寺や民間宗教家の影響を受けて「施行」という固ぐるしい名称となり、「狐の施行」とか「寒施行」のような行事名となり、やがては稲荷講がこれを担当し、イネリサンと称するような稲荷行者がオイナリサンと称するようになった・・・・・

両説は、供物饗応と民間宗教者との関係が正反対であるが、いずれもキツネへの供物饗応と稲荷行者による託宣が稲荷センギョの構成要素であることは共通している。

ところで、西畑の伝承では１３軒が稲荷センギョを行っていたが、慶長年間に成立した天満宮の宮座の西畑の構成員が１９軒であったことを考えると西畑のルーツの家ほとんどが稲荷センギョを行っていたとも想像できる。また聞き書きによると１３軒すべての家で稲荷が祀られ、さらに旦那寺西福寺、氏神天満宮にも稲荷社があるという。つまり、稲荷に関する信仰が秦野地域では一般的であったと考えてもよいのではないだろうか。

では、稲荷信仰はいつ池田に来たのか。その起源であるが、『稲東家日記』によると天明４（１７８４）年に稲東家では別宅に豊川稲荷を勧請し、以降毎年１１月８日には御火焚き神事を行うようになったとある。

> 稲東家には山手の横岡に別邸があったが、『稲東家日記』には、天明四年（一七八四年）の十一月十日に、この稲荷が勧請された次第が記されている（『稲塚家日記』文久二年表紙）。この稲荷は、当時の稲東家の主人が昼寝をしてい

る時、白髪の老人が稲を担いでくる夢をみたことをきっかけに勧請されており、稲束という家の名もこの夢に由来している。それ以降毎月十一月八日には、稲荷社の前でお火焚き神事が行われるようになっている。稲荷勧請の次第は個人的な夢に由来したものであるが、近世後期には池田で稲荷信仰が非常に流行し、伊居太神社にも稲荷社が勧請されるほどであった。

『池田市史５巻』p.127

横岡稲荷大明神勧請
　天明四年甲辰歳十一月十日〇
　尊号豊川大明神
右稲荷勧請訳者、太忠君於不藏亭午睡中白髪老翁多分之稲ヲ荷來吉夢ニ付勧請夫（より）稲束姓有之也此故也

『稲束家日記』文久二年表紙裏『池田市史５巻』p.1127

また、伊居太神社では文化８（１８８１）年に境内に稲荷を勧請し、以降初午には多くの参詣者が集まるようになった。これらを参考にするなら江戸後期に稲荷信仰が何らかの形で池田に流行したと考えられる。流行神であった稲荷を持ち込んだのは誰なのかについては不明だが、初午に関しての井口堂の「昭和初期まで、京都の伏見稲荷から神官が来て祝詞をあげていた」という伝承には興味深いものがある。伏見稲荷との関係がうかがわれるこの伝承からは、稲荷流入に伏見稲荷関連の稲荷行者の存在が見え隠れする。

以上を整理したものが＜表３＞＜表４＞である。

表３＜キツネを祀る行事とその場所：初午＞

地区	稲荷社の場所	内容	備考
吉田	吉田公園	御神酒、赤飯、アゲ、お菓子を婦人会の人たちがお供えする。細川神社の宮司にご祈禱してもらう。	
井口堂	稲荷山古墳	お供えはお菓子などで、後で子供たちに配られる。現在は三月におこなわれている。	昭和初期まで、京都の伏見稲荷から神官が来て祝詞をあげていたという。
綾羽	伊居太神社境内		文化八年（１８１

			１）に境内に稲荷を勧請し、翌年の初午には多くの参拝者を集めている。
古江			初午には清荒神に参った。

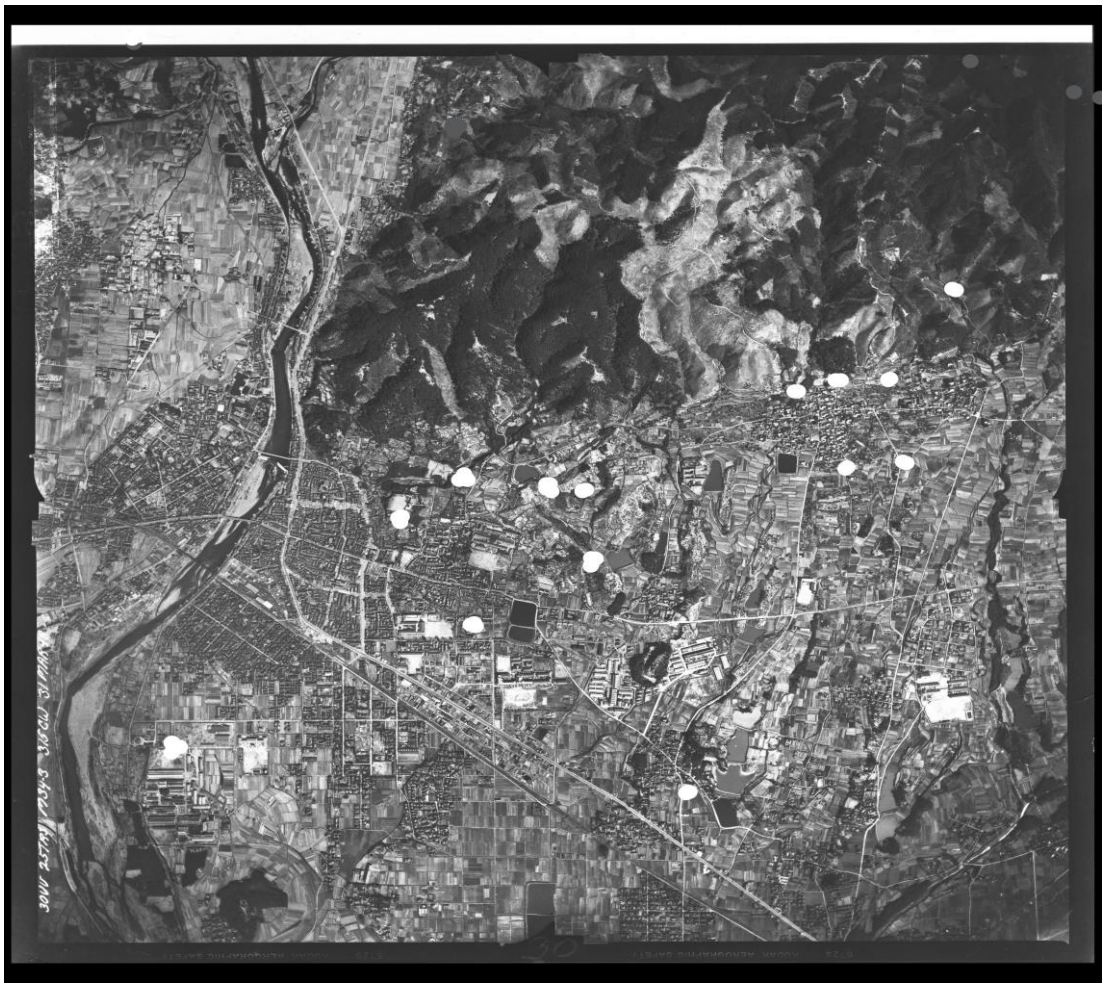
表４＜キツネを祀る行事とその場所：稲荷（寒）センギョ＞			
地区	巡行地	供物	備考
秦野	西福寺境内稲荷社 西福寺の山の裏 天満宮の稲荷社 天満宮の山の裏 吉祥院の稲荷社 ミロクサン 石積の滝（かつて温泉あり） 我孫子の森（秦小北・仏日寺西）	大寒の頃、昼に１３軒の家が集まり、油揚げを刻んだものと小豆飯を１００個ほど包んだものを巡行地に置いてまわる。	昼のお供えづくりは各家持ち回りだったが、夜はそのメンバーが再びＺ家（祈祷師Ｚの家）に集まってお勤めをした。
才田・尊鉢	戦前は、ドンドバなど狐がいそうな所	寒の時分には、カンセンギョウ（寒施行）をする。アンコロ。餅、赤飯を炊く。戦前は、ドンドバなど狐がいそうな所にアゲ（油アゲ）を竹の皮に包んで置いた。この時、「センギョウ　センギョウ　ドウセンギョウ」と囃しながら回った。	
荒木（現大和）	鎮山（現図書館、横	大寒の入りに竹	

	岡公園） 池田山の峠の茶屋 接待池（現五月丘小学校） おんばのふところ 城山町 ひょうたん山（現ダイハツ池田工場）	の皮に、油揚げを乗せた大きな赤飯のおにぎりを二つ包む。３００ほど作って、これを、夜、大人子供３０人ほどで「せんぎょ、せんぎょ、稲荷せんぎょ」と言いながら置いて帰る。	
城山	町内の地蔵・祠	個人的に稲荷を家で祀っている家も多かった。彼らは、寒の間に、男性数人が寄り合い、「センギョ、センギョ、お稲荷さんの野センギョ」と言って、辻々の地蔵さんや祠にかやくご飯を供えていった。	その後、特定家に集まって巫女よせをして、託宣を聞いた。女になるおばあさんが町内に二人ほどいた。普の服装であるが男性が「どちらですか」と尋ねると、憑いた神名を答える。
古江	稲荷社（森さんの屋敷の山手） 山の方 村の中	子供たちが「正一位稲荷大明神」と書いた旗を持って、「イナリダイミョウジン」「イナリセンギョ」「オイナリセンギョ」と声を出して、鐘やらを持って山の方や村の中を回った。後で森さんからお菓	

		子をもらった。これには女の子も参加していた。	

このような伝承から浮かび上がるのは農業神として祀られる稲荷神＝キツネの姿である。日本人の民俗的心性にキツネは恐怖の存在ともに、もう一つ、神様としてのキツネが存在するのである。そして、この矛盾するキツネ像がどのようにして生まれたのかは所説あり、ここでは考察を控えるが、キツネには相矛盾する両義的な特性があることがこれで明らかになった。また稲荷センギョのキツネへの供応場所を白抜きで示した＜写真２＞（国土地理院地図より作成）を見てもわかるように、神様としてのキツネの出現場所も悪者としてのキツネの出現場所と同じく境界領域であった。もっとも神様としてのキツネは、聖なる空間であるお寺や神社、祠にも出現する。これは悪者としてのキツネが出現しない場所である。しかし、日常を超えた霊的なパワーを持った存在としてのキツネという神観念は、双方に共通するキツネ認識である。

＜写真２＞



（３）民俗的心性から生まれた人物像

キツネは人間に身近な存在で「怖いもの（悪者）」であり、かつ「尊いもの（神様）」でもあった。「ごんぎつね」のごんは、民俗的心性に根差した両義性を背景に形象された。ごんが悪者から神様に変容しても、人物像の歪みとして受け取られず、変容が素直に受容されるのは、キツネの両義性が私たちの中に無意識に浸透しているからだと考えられる。ごんは、サルでもないタヌキでもないオオカミでもない、まさにキツネであったからこそ、悪者と神様の双方に立脚した主人公になりえたのである。

［２］冒頭部は必要か？

１．冒頭部の意味

最後に、第３の問い「冒頭の一文は必要か？」を考えたい。

これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。

結論から述べるなら必要である、というより、この一文がなければ、「ごんぎつね」は生まれてこなかったとも言えよう。あらゆる物語の冒頭部に不必要なものは存在しない。私は、以前、物語（小説）の冒頭部に関して、次のように述べた（山際２０１３）。

小説にとって、冒頭はもっとも重要な部分である。

メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かねばならぬと決意した。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。けれども邪悪に対しては、人一倍敏感であった。

有名な太宰治「走れメロス」（東京書籍　２０１２ａ）のこの冒頭部分は、主人公のメロスの性格、これから起こる事件の行方、メロスの職業や暮らし等々を想像させて余りある。

真新しい外とうを着込んで、片手に包みを提げた区警察署長オチョメーロフが、今しも、市の立つ広場を突っ切っていく。

チェーホフ「カメレオン」（東京書籍２０１２ｂ）でも冒頭部分の形象は主人公の精神性を暴露するかのようである。

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、私は帰った。もう真冬の候であった。そのうえ、故郷に近づくにつれて、空模様は怪しくなり・・・・・・・　ああ、これが二十年来も忘れること

のなかった故郷であろうか。

　魯迅「故郷」（東京書籍２０１２ｃ）では、幼いころ楽しく過ごした思い出の土地の厳しく苦しい変容をイメージさせ、このあとの「私」の苦悩を予感させる。

　このように、すべての冒頭部分は小説の母胎であるといっても過言ではない。母胎からさまざまな登場人物や出来事が発生し、幸福や不幸が生まれる。（中略）小説の母胎である冒頭部分には、後段に展開されるストーリーの種がたくさん埋め込まれてる。つまり、課題の宝庫である。そこで見つけた課題は小説の内容理解にとって重要なキーになる。すなわち冒頭部分の課題に取り組むことが小説の深い読みにつながっていくのである。

　冒頭部には必ず物語の種が埋め込まれている。「ごんぎつね」も同様である。実は、一見不必要の見えるこの一文こそが「ごんぎつね」の母胎部なのである。すなわち、冒頭部をどう読み解くかが「ごんぎつね」の読みを左右するといってよい。

　では、これから冒頭部を丁寧に読み解いてゆきたい。

２．「権狐」冒頭部分から分かる村落共同体の構造

　「ごんぎつね」に原作品があったことはよく知られた事実である。最初、新美南吉によって「権狐」として執筆された作品に鈴木三重吉が手を入れることによって「ごんぎつね」は誕生した。その新美南吉原作品の冒頭部は、実は一文ではなく次のような叙述であった。

　茂助というおじいさんが、私たちの小さかった時、村にいました。「茂助じい」と私たちは呼んでいました。茂助じいは、年をとっていて、仕事ができないから子守ばかりしていました。若衆倉の前の日だまりで、私たちはよく茂助じいと遊びました。私はもう茂助じいの顔を覚えていません。ただ、茂助じいが夏みかんの皮をむく時の手の大きかった事だけ覚えています。茂助じいは、若い時、猟師だったそうです。私が、次にお話するのは、私が小さかった時、若衆倉の前で、茂助じいからきいた話なんです。

　この叙述を一文に凝縮したものが、鈴木三重吉が手を入れた「ごんぎつね」も冒頭部であった。つまり、「権狐」冒頭の叙述は推敲される前の「ごんぎつね」の原風景だといってもいい。そこで、まずは「権狐」の冒頭部を読み解いていく。

　この冒頭部は「ごんぎつね」の舞台設定でもある。兵十が暮らす村落共同体の

構造がこの叙述から浮かび上がってくる。その構造を読み解くことが、実は「ごんぎつね」が伝えられてきた意味を明らかにすることにもつながってくる。

この叙述から分かる事実について整理する。まず最初に登場するのは元猟師である茂吉じいである。「ごんぎつね」を伝えたこの茂吉じいは、今までたくさんの動物を獲物として捕らえてきた経験を持っていると考えられる。鉄砲で動物を射殺してきたプロフェッショナルである。その元猟師が、村の知り合い（兵十）が一匹のキツネを殺した話をわざわざ伝えている。つまり、この村では、ごん射殺事件には大きな意味があったと考えられていたということであろう。次に登場するのは「私たち」という村で最も幼い世代である。そして、重要なことは、茂吉じいは、「私」にごん射殺事件を個人的に話を伝えたのではないということである。冒頭部は「私たちが若衆倉の前で茂吉じいとよく遊んでいたこと」から始まる。このことに意味を府川（２０００）は次のように考察する。

その交流は、村落共同体が次世代へと伝統を引き継ぐ場である若衆倉の前でなされる。この場で村の文化が、年長者から年下のものへと受け継がれるのである。つまり、「権狐」の話は、茂助爺が「私たち」に伝えようしていた共同体の文化遺産なのだ。そして、その共同体に所属する「私」が、次には「私たち」の代表として伝承された話を語り出す。いうまでもなく、その話の背後には常に複数の聞き手があり、仲間が集う場があった。

「ごんぎつね」の話は、茂吉じいから「私たち」へ、「私たち」からさらに次世代へ語り継がれる共同の文化遺産でなのである。共同体の文化遺産とは、その共同体を維持するための重要な財産である。村における正月行事、トンド、氏神の祭礼、盆行事、そこで行われる芸能、語り継がれる昔話・・・・これは余暇を楽しむだけの文化行事ではなく、共同体が未来へ向かって存続していくための重要な行為（神祭・仏事・芸能）なのである。だから、共同体の文化遺産なのである。では、なぜ、兵十の村の重要な文化遺産としてごん射殺事件が位置付けられていたのだろうか。

３．鎮魂の語りとしての物語

少し視点を変えて、ごんの人物像が悪者から神様へと変容したことからこのことに迫ってみたい。

この「ごん射殺事件」の発生場所は兵十宅、関係者は兵十とごんである。つまり、この事件は、兵十とごんしか知らない出来事であったはずである。それが村の茂助じいに伝わっているということはどういうことか。いうまでもなく兵十

が茂助じい（あるいは、茂助じいの上の世代の村人）にこの事件を語ったことを意味する。兵十は何を語ったのか。それは「ごんぎつね」に書かれている内容すべてである。いたずらばかりしていた悪者ごん、悪者ごんの反省、そして度重なる償い、その償いを神様のしわざと考えた兵十、その反省と償いを知らずにごんを射殺してしまった兵十の悔恨・・・・このような内容を兵十は茂平に語ったと想像される。兵十はこの話を語る過程で、自分が気付かなかったごんの償い行為は神様の行為に比肩する行為だと痛感したのではなかったか。その神様のような行為をしていたごんを射殺してしまった深い悔恨の念が、兵十、そして兵十の思いに共感した村人をして、ごんを本物の神様にまで昇華させたのではないだろうか。。

ごんが非業の死によって神様への昇華することは、日本の民俗的な伝統にも合致する。非業の最後を遂げた人物が神になることは日本の伝統的な神観念でもある（御霊信仰とよばれるこの神観念の代表が菅原道真の天神信仰である）。非業の死を遂げたものを神として祀らなければ、共同体に災厄が起こる。死者を神として丁重に祀ることは共同体を維持するための必須の行為であった。そして、死者を慰めるためには、霊を祀ること、死者の生前の行為を語ることが必要であった。例えば『平家物語』は源氏と平家の戦争アクション物語ではなく、平家の栄枯盛衰を語ることで、滅び去った平家一門の霊を慰めるための鎮魂のモノがたりであった。元々平家物語は黙読するために創作されたものではなく、語りで死者の鎮魂をする琵琶法師によって語り継がれていった作品である。ちなみに琵琶法師が『平家物語』を語った場所は多くの死者を出した戦場跡であった。平家の鎮魂が必要であった理由は、平家滅亡後に起こった地震や社会混乱を当時の人々が平家の怨霊の祟りと考えたことにある。平家の怨霊を鎮めなければ、社会が大混乱に陥る。そのために平家物語が創り出されたのである（渡辺１９７８）。秦小校区にも下渋谷の庄屋チョンベイさんが年貢軽減の直訴をして打ち首になり、それを村人たちはその義心をしのび、サイノカミとして祀ったという伝承がある。

ごんの物語は、非業の死を遂げたごんの鎮魂を目的に生み出された。そして、兵十の悔恨の情を超えて、兵十たちの共同体を平和に維持するために世代を継いで語り継がれたのである。共同体の維持のための物語であるからこそ、ごんの物語は共同体の文化遺産となったのである。もしかすると、村ではごんを祀った祠や神社が建てられていたのかもしれない。

４．「ごんぎつね」の母胎としての冒頭部

「権狐」冒頭部の読み解きからわかったことを整理すると次のようになる。

A　兵十は償い（神様の行為）をしていたごんを射殺してしまい深い悔恨にとらわれた。
B　兵十は自分の犯した過ちとごんの行為（神様の行為）を村人に語った。
C　非業の死を遂げさせてしまったごんを祀る必要を兵十や村人は痛感した。
D　彼らはごんの鎮魂をしなければ共同体が維持できない出来事が生じる可能性があると考えた。
E　ごんは、神様として祀られ語り継がれる存在へと昇華した。
F　非業の死を遂げたごんの鎮魂を目的とした文化遺産として「ごんぎつね」共同体で代々語り継がれる物語となった。

「権狐」に比べ、「ごんぎつね」の冒頭部は「これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。」というように多くの叙述が削られている。しかし、「権狐」冒頭部の芯になった「茂平が私にごんの物語を語った」という設定には変わりはない。この一文だけからでもＡ～Ｆを読み取ることが可能である。「ごんぎつね」冒頭部は「権狐」冒頭部と異なる意味合いで書かれたのではなく、その凝縮であり、この冒頭の一文で設定された枠組みで物語は展開をとげてゆき、悲劇的な結末を迎えるのである

　また、冒頭部と結末部は見事に照応している。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落しました。
「ごん、おまいだったのか。いつもくりをくれたのは。」
ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。
兵十は火なわじゅうをばたりと取り落しました。青い煙が、まだつつ口から細く出ていました。　（「ごんぎつね」p.25）

これまでディスコミュニケーションであった兵十とごんの間にコミュニケーションが成立したことを示したのがこの結末部である。そして、コミュニケーションの成立があったからこそ、「ごんぎつね」の物語は生まれた。すなわち、これまで縷々述べてきたようにコミュニケーションが成立したからこそ兵十がごんの物語を他の村人に語り、村人がその話を語り継ぐようになったのである。結末部が冒頭部を生み出す契機となり、冒頭部が終末部にいたる物語の母胎となって、「ごんぎつね」の枠組みを設定しているのである。見事なまでの首尾照応である。「ごんぎつね」冒頭部の持つ極めて大きな意味を私たちは噛みしめる必要があろう。

おわりに

今回、本稿を書くきっかけになったのは、２学期に本校４年生のある担任から「ごんぎつね」の教材研究に関する相談を受けたことにあった。教員１年目の彼といろいろ話をするうちに、ふと『池田市史 民俗編』「秦野の民俗」の章にキツネに騙された話とその反対にキツネに感謝する稲荷センギョの話、つまり、キツネに関する両極の伝承が載っていることを思い出した。それを機に『池田市史民俗編』や『池田・昔ばなしと年中行事』を精査していくと池田にキツネをめぐる豊かな伝承が残されていることがわかった。また稲荷センギョを実際に行っていた長老からお話を聞くこともできた。そして、そこから学んだキツネと人間の交流に関わる民俗的心性を念頭に「ごんぎつね」を読み返してみた。すると「ごんぎつね」の読みに新しい生命を吹き込むことができることがわかった。その副産物としてキツネ伝承にとどまらず、池田には教材研究に資する豊かな民俗や昔ばなしが存在することにも気づいた。今後、池田の教職員が『池田市史』や『池田・昔ばなしと年中行事』を活用されることを強く願いたい。また「ごんぎつね」冒頭部についての私見は、二瓶弘行先生（筑波大付属小）のセミナーを聴講した本教教員が「冒頭部があることで兵十とごんの気持ちが通じたことがわかるという話をうかがって腑に落ちました。」と語ってくれたことをヒントにして考え出したものである。

本稿が今後の「ごんぎつね」の教材研究の一助になると幸いである。

(注)

ごんという名前については、従来は次のような解説が一般的である。

一九二〇年代の中頃（大正時代）まで愛知県知多郡阿久比町植大の権現山に狐が住み、岩滑では六蔵狐と呼んでいた。また、知多半島の中央にある大興寺村（愛知県常滑市大興寺町）の東端に鐘つき池と呼ばれる池があり、夕風が吹きはじめると池の底から「ゴーン、ゴーン」と鐘の音が聞こえ、村人たちはこれを狐が打つ音と言い伝えて、その狐を「ごんぎつね」と呼んでいた、いわれる。 『新美南吉童話大全』p.111

＜引用・参考文献＞

［歴史・民俗学関係］

内山　節　　『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』講談社現代新書　２００７

赤田 光男　　「狐の施行と稲荷行者」『朱』４８号 p. 211 伏見稲荷大社２００５

池田市広報広聴課編
『池田・昔ばなしと年中行事』池田市　１９８３
池田市史編纂委員会編
『新修池田市史第５巻　民俗編』池田市　１９９８
井之口 章次 「狐施行のこと」『日本民俗学』88 号 p.33 日本民俗学会　１９７３
久下 正史　「キツネとダイサン：大阪府泉南部の事例から」『鶴山論叢』９ 鶴山論叢刊行会　２００９
前野 雅彦　「南山城村の寒施行」『京都民俗』 京都民俗談話会　２００６
渡辺 貞麿　「『平家』成立の背景―歴史語りと鎮魂―」『文藝論叢』第 10 号 大谷大学文藝学会　１９７８
［国語教育関係］
西郷 竹彦　『西郷竹彦文藝教育著作集１７巻』p.p.65-66 明治図書　１９７５
新村　出　編『広辞苑　第三版』岩波書店　１９８３
田口　尚幸　「作者の周到な計算を知ればさらに楽しい『ごんぎつね』」 http://yumenavi.info/lecture.aspx?GNKCD=g003767
府川源一郎　『「ごんぎつね」をめぐる謎　子ども・文学・教科書』p.165 教育出版　２０００
新美 南吉　『新美南吉童話大全』講談社　１９８９
新美 南吉　「ごんぎつね」『国語四下　はばたき』光村図書出版　２０１５
山際　博　「森鷗外『最後の一句』の教材研究と授業-冒頭部分の想像読み-」『研究集録いけだ』第２５号 p.68 池田市教育委員会　２０１３
［地図］
国土地理院地図 https://maps.gsi.go.jp/help/
＜写真１＞＜写真２＞は、国土地理院地図掲載 480331USA-M34-3-30 を加工して作成